認定 NPO 法人　東京盲ろう者友の会　会員
道見　美由紀

【本日お話する内容】

１．自己紹介
　　～『ろう者』と『盲ろう者』である私～
２．日常生活で困っていること〈私の場合〉
３．『盲ろう者』として、伝えたいこと

１．自己紹介　～『ろう者』と『盲ろう者』である私～

生後間もなく、高熱が続き、発育が遅れ、３才の時、耳が聞こえないことがわかりました。原因は不明です。

就学前から、ろう学校（今は、聴覚障害特別支援学校）に通い、発音、口話、手話などのコミュニケーション等を学びました。

小学部４年生の時、ぶつかったり、転んだりすることが気になり、眼科を受診。視野が狭いことが判明。高等部を卒業するまで、視野に関しては大きな不便もなく、聴覚障害者として過ごしました。

卒業後、就職し、結婚、出産もしました。年を重ねていくうちに見えにくくなり、不便を感じることが多くなりました。

15 年前、診断がつきました。主な症状は、暗闇で見えにくい（いわゆる夜盲）、視野狭窄、視力低下、色覚の異常で、進行性です。それから、見えなくなる不安と絶望の毎日でした。２年前に『視野障害』の認定を受けました。

私は『盲ろう者』です。視覚と聴覚の障害、両方持っています。

『盲ろう者』のイメージはヘレン・ケラーを想像するかと思います。『盲ろう者』の見え方、聞こえ方は様々です。『盲ベース』『難聴ベース』『ろうベース』があります。ベースの程度により『全盲ろう』『全盲難聴』『弱視ろう』『弱視難聴』の区分もあります。私は、「ろうベースの弱視ろう」になります。ろう者と盲ろう者の中間で、視野狭窄と夜盲があり、右目は虫眼鏡のレンズを貼り付けたように見えにくい状態です。

２．日常生活で困っていること〈私の場合〉

盲ろう者の生活で困っていることはたくさんあります。『盲ろう者』は、ベースと程度により日常生活において健常者には想像がつかない困難があります。ベースと程度により困難な状況はそれぞれ違います。

私の場合は、視野狭窄はありますが、視力がありますので、一人で行動ができます。

街の中で声をかけられても、聞こえません。「聴覚障害者」は見た目では気づいてもらえません。声かけに対して反応がないので、去られてしまいます。悲しい気持ちになります。

人の多いところで歩くときは、人とぶつかりやすいので、白杖を使います。白杖は「視覚障害者」であることを理解してもらうために必要なアイテムです。しかし、「聴覚障害者」の私には、せっかく手助けしてくれようと声をかけられても気がつかないことが多く、「耳が聞こえません」と伝えると驚かれて、戸惑われます。

私のコミュニケーション手段は主に手話です。手話がわからない人には、筆談、口話、身ぶりを使います。口話は口の形で読み取ります。時々伝わっているようで伝わらないこともあります。例えば、「おかず、何？」「おやつ、ない？」口のかたちは同じになります。手話であれば正確に伝わりますので手話は大事です。筆談もそうです。しかし、見えにくくなっていくうちに、難が出始めています。

私の場合の見えにくさの具体例をあげます。

○鉛筆、芯の細いボールペン、赤色のボールペンの字

○スマホの暗い液晶画面、小さな字

○書類記入の際の枠がミシン線（例えば、名前にふりがなを入れるミシン線が見えにくいのではみ出す。）

○暗い照明の店内。足元、相手の顔、メニューの文字

○色の識別（黒と濃紺、濃ピンクとオレンジ色、水色とグレーなど）

○床、壁、柱が同一色の場合、境界線がわからず壁や柱、ガラスにもぶつかる。

○縞模様の床と段差の区別がつかない。(石段や山道も苦手です。)

○夜道は１メートル先は暗くて何も見えない。

など

３．『盲ろう者』として伝えたいこと

「盲ろう」として、自分が生きていくのに自信を失くした時期もありました。盲ろう協会があることを知りながらも、自分は『盲ろう者』でないと思いたいと逃げていました。情報が乏しかったということも理由の１つです。３年前から東京盲ろう者友の会の支援を受けています。生活面で不自由なところを、盲ろう向けの通訳・介助者の同行サービスを利用しています。このサービスのおかげで、諦めていたことが可能になり、行動範囲が広がり、生き甲斐も与えてくれました。本当に助かっています。

私が『盲ろう者』になって驚いたのは『盲ろう者』のコミュニケーションの方法です。コミュニケーションツールとして、音声、手話（弱視手話）、触手話、手書き、点字、指点字の存在です。点字ができる人は、点字機器の「プレイルセンス」というものをパソコンやスマホに接続すると、メールや LINE が使えるというものもあります。これがあることにより、盲ろう者の仲間と情報交換ができます。見えにくさの悩みを共有できたり、明るく前向きに生きている姿を見知ることができたり、勇気と元気をもらっています。

最後に、皆さんにお伝えしたいことは、社会には『盲ろう者』もいることを知ってほしいということです。聞こえない、しかも見えにくいで暮らしている盲ろう者が近くにいるかもしれません。いえ、いると心に留めていただきたいのです。

ものや形のバリアフリーは進んでいますが、心のバリアフリーは遅れており、いろいろな場面で苦労しながら、不自由を感じながら過ごしています。もし、外で盲ろう者を見かけた時は、「声かけ」「身振り手振り」「筆談（スマホ等の画面で表示等）」「手話」などで接してください。また、日常生活に困難をきたしているようであれば、盲ろう者友の会へ紹介または連絡をしてください。

『盲ろう者』を見かけたときには、驚かず、気軽に声かけや、手を貸してくれる、そんな社会になってほしいと思います。